

# 知的障害部門

(第 16 号)

# 第一部

## 研究の概要

## 1 研究にあたって

### (1) テーマについての経緯

本校は特別支援学校（知的障害部門）の小中高一貫教育校であり、平成20年度に創立30周年という大きな節目を迎え、児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うべく、養護学校から特別支援学校としての新たなスタートを切ったところである。小学部26名、中学部29名、高等部97名の児童生徒が南予地域一円より多岐にわたる方法で通学しているが、自宅が遠く通学困難な64名の者は校舎に隣接する寄宿舎を利用し週末保護者のもとへ帰省している。また訪問教育15名の児童生徒は、週2回計6時間の授業を家庭等で受けそれぞれの教育目標を達成すべく学習や活動等を行っている。本年度のマニフェストを「見る、聴く、感じる一心と向き合い一人一人のニーズに応える」とし、自立・社会参加を目指して生きる力や自分らしく輝き、たくましい児童生徒の育成、分かる授業・楽しい授業の実践、保護者とともに歩む教育の展開、連携と協力などを具体的実践内容としている。豊かな児童生徒の五感から吸収されるすべての経験が学びとなり、生活に生かされ積み上げられていくよう日々の教育活動に取り組んでいる。

### (2) テーマ設定の理由

児童生徒が一人一人の自立と社会参加を目指し、自ら考え行動する力や多くの人とのふれあいを通して協同する力の育成を図っているところであるが、教育の原点ともいえる児童生徒の実態を早期にまた正確に把握し教育的ニーズの充足につなげていく方法等について見直しの必要性を感じている。また、学年や部進行に伴う段階的・系統的な学習内容や方法についても検討し、それぞれの発達段階において的確で効果的な支援を確立しなければならないと考える。そこで、児童生徒の教育的ニーズや特性が活かされる丁寧で分かりやすい授業のあり方を研究し、児童生徒が地域社会において自分らしく生きる力が育つことを目指して本テーマを設定した。

### (3) 研究の目的

児童生徒の実態把握をより綿密に行い目標設定につないでいく方法を研究することにより、児童生徒一人一人の持つ教育的ニーズを確実に捉えることができるようになる。それをもとに効果的な支援方法を精選し、楽しく分かりやすい授業を積み重ねていく。学習した内容が般化され活用できることとともに評価を繰り返すことで、児童生徒が自分らしく生き生きと自立し社会の中で生活できることを研究の最終目的としている。

そのためには、「個別の指導計画」を身近に活用できるツールとして再度位置付けること、指導や支援の場面において児童生徒にとって有効だった、あるいはそうでなかったかかわりなどについて進級する次の学年や部と共有できるよう各部で体制を整えること、小中高一貫教育校としての責務が果たせることを目指している。結果、教師個人にとどまらず学校全体の専門性と授業実践力の向上を図りたい。また、この研究を通して「個別の教育支援計画」の充実が図られ、教師間及び保護者や地域といった児童生徒を取り巻く様々な社会資源が連携・協力して継続した支援を行う基礎としたい。

(4) 研究の方法

ア 年間研究計画

月	内 容	評価
3月	移行支援会議	
4月	↓「個別の指導計画」の改善・内容の検討 ↓ 実態把握、諸検査の実施	
5月	研究授業計画の立案、プレ研究授業 「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」の作成 「個別の指導計画」を活用した授業実践 *年間を通しての活動	校内相互評価  第三者評価
6月	第1回公開授業週間 第1回学校関係者評価委員会 研究授業の実施	// 講師指導評価
7月	<公開授業研究及び講演会（外部講師による）6/3>	校内相互評価
8月	校内研修	
9月	↓「個別の指導計画」の見直し	
10月	↓	第三者評価
11月	第2回公開授業週間 研究授業の実施	講師指導評価
12月	<公開授業研究及び講演会（外部講師による）11/25 >	
1月	研究の結果及び分析のまとめ	第三者評価
2月	↓ 第3回公開授業週間 ↓ 研究成果のまとめ及び研究報告書提出 2/3	第三者評価
3月	第2回学校関係者評価委員会 次年度に向けての課題等の整理	

イ 主な研究内容

- (ア) 新年度の引継ぎを一層綿密に行い、実態把握に努める。また、指導目標を踏まえた具体的指導と指導方法を研究する。
- (イ) 授業に直結できる「個別の指導計画」の工夫と改善を行う。「個別の指導計画」に基づき、個々の目標を確認しながら具体的支援方法を研究する。
- (ウ) 専門性と授業実践力の向上を目指し、外部講師による授業研究・講演を通し、課題を分析して改善策を見出す。
- (エ) 全教員がP D C Aサイクルを通した研究授業を年間3回行い、個々の授業力を向上する。
  - \* (ア) (イ) (ウ) については、各部で具体的研究方法を計画し実践した。(エ) については、部の枠組みを超えて互いに授業を参観し、支援に対する客観的な感想やアドバイスを評価シートに記入し、授業者はそれを授業改善に向けての自己評価の材料とした。合わせて、効果的な支援やそうでなかった支援をアセスメントし整理・分析することにより、児童生徒個々の状況や場面に応じた支援のあり方についてまとめる。
  - \*具体的な取組は次頁の図「校内研究授業の流れ」のとおり

# 校内研究授業の流れ

授業者の取組

点検・評価等

## 学習指導案の作成

- ・ 支援と手立て及び評価の視点を明確にする。
- ・ 改善した点を明記する。

## 学習指導案の完成

## 参観者授業評価シートの作成

- ・ 授業者氏名等
- ・ 評価してほしい視点

部主事による指導

校内ファイルサーバーに保存

全教職員へ授業日程等の周知

研究授業の実施

## 授業自己評価シートの作成

- ・ 児童生徒の様子
- ・ 環境設定について
- ・ 支援について
- ・ 授業改善について  
(具体的な場面における反省点)  
(考えられる原因)  
(次回への改善策)
- ・ 本時の自己評価から考えた今後の具体的目標

授業参観者が参観者授業評価シートへ記入

- ・ 児童生徒の様子
- ・ 環境設定について
- ・ 支援について  
(良いと思った具体的支援)
- ・ 授業改善に向けての場面とアイデア

授業の見直し

参観者授業評価シート → 研究授業者  
部主事  
研修課

よい支援・そうでなかった支援の整理・分析等

全教職員による共有

授業改善

## ウ 部ごとの研究方法

### (ア) 小学部

- 「個別の指導計画」「年間指導計画」の検討・作成
- 学年グループでの話し合いを通じた個々の指導目標・支援の手だてについての共通理解
- 具体的な指導内容・支援の手だて・内容・教材・教具・ティームティーチングのあり方等についてグループで研究
- 学習指導案の作成や授業研究などの話し合いを通じた個々の教師の授業力の向上

### (イ) 中学部

- 環境整備への取組
- 実態把握の方法の見直しと実践
- 個別の指導計画・年間指導計画の作成
- 授業のあり方の検討
- 指導記録の分析及び授業の評価

### (ウ) 高等部

- 十分な引き継ぎ及び観察法・発達検査等による実態把握
- 「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の改善
- 新学習指導要領及びキャリア教育の視点に立った指導内容の研究
- 単元におけるねらい、生徒の目標、ティームティーチングのあり方等授業のねらいの明確化及び改善
- PDCA サイクルを活用した授業改善
- 教室環境の改善

### (エ) 訪問教育

- 「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」、指導記録の作成及び活用
- PDCA サイクルを活用した授業改善

## エ 評価方法

### (ア) 自己評価

「授業自己評価シート」を活用し授業を振り返る。それにより明確になった課題について、教師一人一人が解決策を打ち立て、次回の授業に生かし、さらに評価する。

### (イ) 児童生徒の変容

個々の目標が達成できたか、「個別の指導計画」を活用し評価する。

### (ウ) 第三者評価

学校評議員会、学校関係者評価委員会、公開授業参加者によるアンケートにより評価する。